

# アラブにおける「市場」と「資本主義」の亀裂

—— イエメン社会を事例として ——

田 中 洋 子

はじめに 純粋な市場モデルとしての「中近東市場」

- (1) 「命がけの飛躍」としての商品売買
- (2) 「くつつぎ（ラーハ）」としての生活
- (3) 「男女別世界」の二重性

おわりに 「市場」と「資本主義」との亀裂

## はじめに 純粋な市場モデルとしての「中近東市場」

中近東における市場は、純粋な「市場モデル」に限りなく近い現実の存在であると多くの論者から想定されている。例えば、森嶋通夫は『思想としての近代経済学』の中で、マルクスとワルラスは完全競争の市場での経済を想定しているという意味で、市場観において共通しているとし、その上で、「経済学は長い間、このような市場観に立って競争機構を分析して来たのだが、このような市場観が完全に正しいのは『中近東の市場』(oriental bazaar)と近代資本主義の一部の市場に限られている」と述べている(森嶋, 4-5)。これについて加藤博は『文明としてのイスラム』の中で、更にブローデルによる「市場経済」観の想定との共通性も指摘する。「交換経済の世界, それも合理的な計算をする多数の経済主体と, 財やサービスの需給の不均衡を速やかに解消する価格メカニズムから成り立つ完全競争の世界」は, まさに「森嶋がバザール経済のなかに読み取った世界」であり, そこで想定されている「アルプスの南の地中海世界と中東イスラム世界のイメージは多くの局面においてダブっている」(加藤 1995, 241-242) という。

つまり中近東の市場は、自由競争が完全に達成される世界として、近代資本主義論、あるいは経済学における市場モデルの原型を提供してきたというわけである。

しかしこのような「合理的計算をする主体」に基づく「完全競争モデル」を中東のバザール経済の中に求める見方とはきわめて対照的に、アラブ・中近東における生活慣習は、約束の変更や破棄を日常的に含むいい加減なものであるというイメージも一方で根強く形成されている。それは特に「インシャーアッラー」（アラー（＝神）の御心のままに・神の意志あらば）という言葉、そしてそれに基づく日常習慣に表れている。

例えば、文化人類学者の片倉もと子は『イスラームの日常世界』の中で次のように述べる。「『神の意志あらば』という返事は、百パーセント確実なときでも、使われる表現であるから、それほどいらいらすることもない。しかし、いらいらしているこちら側の期待どおり(?)に、約束をすっぽかされることもある。病気になったとか、突発的な事故があったとかのこともあるが、たいした理由はないと思われるのにキャラにされることもある」という（片倉1991, 28-29）。同じく人類学者でヨルダンの村落滞在記を著した清水芳見も、知人の友達が会いたがっているから話をしてほしいと頼まれて自宅で接待の用意をして待っていたが、ずっと待っても姿を見せず一日を棒にふることを、四度繰り返させられたという（清水, 207-210）。

一見したところ、完全競争モデルを実現する場としての純粋な市場のイメージと、「インシャーアッラー」をベースにしたあいまいな神まかせの慣習を持つイメージとは、その社会経済観において大きくくいちがっているように見える。この相反する二つのモデルは、実際の社会においていかなる関係にたっているのであろうか。異なる社会イメージはお互いにどのように関係しあい、そしてそのことは、アラブ世界における資本主義経済の発達・経済成長にどのように関連しているのであろうか。

ここでは、1996年夏に滞在したイエメン共和国における経験をベースに、1992年夏におけるシリア共和国、ヨルダン・ハシミテ王国とエジプトでの滞在経験によって補完する形で、アラブにおける市場と社会との相互関係のあり方を考えてみたい。もちろんそれぞれ短期の乏しい経験ではあるが、あまり日本ではイエメンやシリアの現実が多く知られていない現状があることから、アラブの現実をあえてできるだけ具体的に描き出す中で、そこでの社会経済関係のあり方を題材に、市場と経済・社会との関係を多少とも考えてみたいと思う。

### (1) 「命がけの飛躍」としての商品売買

#### ベイト・ファル・アキーフの金曜日

イエメンの首都、高原にあるサナアから、マナハ、ハジャラをへて、アフリカのエリトリアと向かい合う紅海沿いの町アル・ホデイダに下りれば、そこから「アラビア半島一の大バザール」とも言われてきたベイト・ファル・アキーフの金曜日までバスで2時間ほどである。40度前後の気温に紅海からの湿った空気がプラスされ、全身黒い服を着て歩くにはエネルギー消費度の高い場所である。砂ぼこりが舞い、所々開けられている道路の穴には、捨てられても朽ちないポリ袋によって地層が形成されているのが見える。市に近づいていくにつれ、車の後部の棚の中に所狭しとヤギ・牛・羊、そして立ち乗りしている多くの男たちを乗せた、トヨタのハイラックスが次々と姿をあらわす。車の棚の多くはイエメン流に改良され、豪華なものになると、色とりどりのモザイク模様が施されている。

金曜日の大バザールとは、見渡す限りの広い場所に、炎天下、頭に布を巻いた男たちが手に手にニワトリを持ち、ひもで首をくくった四、五匹のヤギを引っばり、やせたロバやいやがる子牛を引き、尻尾に脂肪をたくわえた羊をたばねて連れている世界である。人口・動物密度が非常に高く、その中を歩くだけでもヤギにぶつかられ、ロバと肌をふれあわせ、牛の尻尾にはたかれる。もち

ろん、その他にも大量のアワの山、編み上げた草のロープの山、麦藁であんだカゴ、色とりどりの布地に古着、トマト・スイカなどの野菜の山、皿に盛られた香辛料、マッチ、プラスチックの櫛やコップ、人形、桶、時計などの日用雑貨類のコーナーもある。途中で別のハイラックスが、大量の魚を持ってやって来ると、人々はまたどっとそこにも押し寄せる。ごくわずかのアフリカ系女性をのぞいて、見渡す限り売手も買手もすべて男性である。

こうした中で行われるイエメン人の商品の売買交渉は非常に激しいものである。自分の商品についてのアピール、特に動物の場合にそれはいかにもいいものであるかについての主張がなされるのは当然であるとしても、特徴なのはそれが実質的な値段交渉に入るとほとんどけんか腰になることだろう。双方とも大きな声になり、声をあらげ、顔を接近させ、ののしりあい、ほとんど手を出し殴り合う寸前の状態にもなる。多くの場合、交渉はこうした険悪な状態の中で一旦は決裂する。その後、まわりの売り買いの状況をにらんで、売手が買手側のいずれかが、もう一度接触を開始し、再び言い合いになりつつも、その中で妥協点から探られるとめでたく売買交渉が成立するわけである。彼らの周辺にいる人々が、彼らの言い合いに対して様々な意見・コメントを加え、それが妥協点を探るきっかけになる場合も多い。

このようなけんかとしての交渉は、決してここだけに見られるものではなく、イエメンでは特に珍しくもない日常的な風景となっている。金曜市から引き上げる際の、交通手段の交渉も同質のものである。柵つき立ち乗りハイラックス、ダッバブと呼ばれる乗合自動車や、個人の車で臨時に乗合として供するものが、金曜市からそれぞれの町に帰る際の主な交通手段だが、特定の町まで行く時の同乗価格の交渉もかなりきびしい。はじめに互いの言い値を言い合い、お互いに冗談じゃないという様子を見せる。その後、どこまでならいくらにしてもいい、とか、前乗った時にはいくらだった、どこからどこまではいくらが相場のはずだという話が延々と続く。だんだん熱してくる交渉に人も集まりはじ

め、本人たちはまた怒気をあらわにして顔を突き合わせ、値段の交渉をする。その時の売手・買手双方の眼はとて一時の演技とは思えない真剣なものであり、殴るまではいかないまでも、肩をこずいたり、押したりするなどして非常に緊迫した雰囲気になり、その中で更に交渉はエスカレートしていくのである。

しかし更に特徴的なのは、一旦妥協点が見つかって交渉が成立すると、ほんの一瞬前まで喧嘩腰だった本人たちが、まるで旧知の友達か親戚であったかのように、仲良く親しく話しあうようになることである。それまでの行き掛かりを忘れたかのように、互いに楽しそうにしている様子は、交渉のきびしさとは実に対照的である。これは「燃え上がった怒りが急速に静まる」アラブ人の特徴としても指摘されている (Hamady, 40)。

#### 殺気だつ「カート」交渉

日常生活の中で日々繰り返される交渉として、イエメンで毎日昼間に必ず行われる、男たちによる殺気だつた交渉をあげることができる。昼食の時間になる頃から、イエメン中の男性はどことなくそわそわしてくる。昼食に何を食べるかよりも人々の関心の中心となるのは「いかにして今日いいカートを買うか」という点である。カートとは木の名前で、この枝の葉をむしって食べる習慣がイエメンにはある。それもすぐに飲み込んでしまうのではなく、噛んだものを頬にためていき、それをどんどんたくさんためて頬がピンポン玉くらい、果てはこぶしくらいまでの大きさにふくらませていく。このカートには覚醒作用があるということで、この効果は頬がふくらんできた頃から徐々にあらわれてくるという。このカートをむしって食べながら、みんなで話をし、お茶を飲んだり、煙草をすったりするのが、男性の一般的な日常の社交であり、一切酒を口にしないイエメン社会でのいわば「つきあい」となっている。ほとんどの男性は昼食を食べ終わった昼過ぎから夕方くらいまで、午後の時間をのんびりと「カート・タイム」として過ごすのが慣習となっているのである。

このカートをめぐる売買取引に、イエメンの男性は日々大きなエネルギーを

消費し、しばしば殺気だった光景も見られる。

カートは、まず新鮮さが命である。そのため、カートを育てている農家が、車でその日の収穫を近くの街まで運び、そこここに昼間だけの臨時のカート屋を開き、摘みたてのカートを売るのである。そこでは、人々が葉の善し悪しの差をよく認識しているため、葉の出方や数、色、種類などの品質にもうるさい注文がつく。新しい枝の場合は、葉だけではなく、まだ黄緑色の柔らかい茎も食べられるので好評である。50センチほどの長い枝で売れる場合もあれば、小枝だけを集めてある場合もある。長い枝の場合、固い葉は食べ残されるので、店の周辺や道路上など、葉のまだ残っている枝がそこかしこに捨てられているのをよく目にするようになる。またよくあるのは、最初から大きさのそろった葉だけを取って20センチくらいに揃え、束にくくってあるものである。これは葉の質が揃っているので人気がある。もちろん急ごしらえの店では、客の好みに合わせて、数本の30センチばかりの柔らかい枝だけを数本だけ選んで売ってもらえる。

そのため、昼食を食べる前後には、まず、今日出たどの店、ないしどの露天の農家のカートがいいかを見定めることに注意が向けられる。まず、いろいろな店をまわってカートの質を見きわめ、また値段交渉では先程と同じように、互いの言い値の大きな開きを埋めるために、熾烈な攻防が行われる。質のいいカートを安く仕入れることは、買手にとって、まさに今日一日の幸せを確保できるかどうかを決める重要な仕事であり、その力の入り方は並みのものではない。また、いいカートを人に分けてあげることで、更に社交性を増すこともできる。売手側にしてみても、日々売りに出す自分のカートの品質への自信と、買手側の焦りを見切った強気があるため、交渉はまた喧嘩の様相を帯びる。決裂してほかの店へ行く場合もあるし、行くと言って帰りかけることで再び大声で呼び止められてまた交渉がはじまる場合もある。これを繰り返し、ようやく最後にはお互いに納得して交渉が成立するわけである。売手側はその次の客を

意識してか、怒りと不満をあらわにしたまま、不本意な値段で買われたことを呪いながら別れる場合もあるし、また逆にニコニコとしながらまわりを囲んでいる知人・友人や子供たちの輪に戻っていくこともある。

こうした交渉では、激しく言い合う以外にも様々な手段が使われる。腰をすえてひたすら商品をほめちぎったり、また売手をほめて説得したりすることもある。ただし客が買う気を訴えると、交渉が長引くにつれ、そんなにほしいのならこの値段でどうだ、とかえって高い値段を提示してくることも多々ある。稀だがおもしろいケースなのは、客が相場より少し安い自分の希望購入価格を提示してから楽器を演奏したり歌をうたい、売手はその音楽に満足すると交渉がそのまますんなり成立するといった場合である。ここまで来ると、値段交渉も、次にみる「くつろぎ」の領域に入り込んでいる。

こうした交渉のスタイルについて、より一般的には次のように類型化されている。「店の主人は、店内に腰かけて本を読んだり、隣の店でおしゃべりをしていたりする。客がきて、スリッパの値段を聞いたとする。客と主人は値段をめぐる30分ぐらい議論するだろう。友達や通行人も、この一種のスポーツに参加する。客は立ち去る素ぶりを見せ、主人はスリッパをしまおうとする。ようやく客はスリッパを買う段になるが、その値段はおおむね妥当なところに落ち着く」(Hamady, 71)。スーク (=バザールのアラビア語) 研究者の黒田美代子は「ここを支配する論理は、一物一価の定式が通用する平面的なものではない。上から一定の経済的規則が与えられ、それに従って等分に平面が分割されるようなものではない。むしろ一々の構成要素が自らを主張し、それを朽みに吸い上げ、纏めていくような論理である」(「スークにおける中東の伝統的経済システム」島居, 158) と述べているが、商品の売買をめぐるイエメン人男性の行動様式は、日常用品から家畜、交通手段に到るまで、常に売手・買手とも商品の品質と市場の動向をみきわめた態度でのぞむ、活発な値段交渉に特徴づけられていると考えられる。時に一触即発の緊迫感の中でぎりぎりの力関係の

バランスを追求しながら行われる交渉取引は、まさにマルクスの言う商品の「命がけの飛躍」を文字通り体现しているかのようなのである。この意味では、組織・制度や規制によって形成され、守られた商品の「定価」があつて当然とされる社会、またその「定価」を売買の基準とすることが当然の前提であると考えられている社会と比較した時、イエメンにおける商品の売買は、まさに純粋な「市場」に基づく要素が大きいとすることができるだろう。

## (2) 「くつろぎ (ラーハ)」の生活

しかしながら、そうした純粋な「市場」の存在は、イエメンの資本主義経済の発展に必ずしも結びついているわけではない。イエメン社会は、こうした売買交渉という経済活動を日常生活の一部として取り込みながらも、その市場メカニズムは生産の場や生活のリズムへと延長されることがないのである。社会全体としてみた時に生活原理として最も重視されているのは、むしろ日々の「くつろぎ」であり、そのためにはそれ以上の経済活動に積極的に立ち入ろうとしないという姿勢を保っているように見える。

片倉(片倉1991, 185)によると、ムスリムが最も重視するのは仕事でも遊びでもなく、「ラーハ」の時間である。ラーハとは「いこい」「くつろぎ」の意味に近く、「ゆとろぎ」とも造語されている。実際にはそれは「家族とともに過ごすこと、人を訪問すること、友人とおしゃべりすること、神に祈りをささげること、眠ること、旅をすること、勉強すること、知識をうること、詩をうたいあげること、瞑想すること、ぼんやりすること、ねころがることなど」をさしている。つまり、ムスリムにとっての理想的な人生とは、神の前によい行いをする事であり、それは、ごろ寝をしてのんびりし、家旅や友人とくつろぎ、いろいろな場所に行きいろいろな人に会って話を聞き、知識を得、みんなで歌ったり踊ったりして時を過ごすことなのである。「市場」での互いの言い値からはじまる一連の駆け引き・交渉もまた、こうしたラーハの生活の中に組み込まれ

たものであり、それもまたラーハの一つの形として、あくまで人生の貴重な価値を実現する手段にもなっているのである。

ハッディース（預言者ムハンマドの言行録）に基づき、「一カ所にじっとしてはいけぬ。なるべくさまざまなことをした方がよい」「礼拝にはできるだけいろいろなモスクへ行き、ちがった人達といっしょに神の前にひざまずくがよい」「モスクに言った帰り道は、行きに通った道ではない道を通って帰ってくるのがよい」と日々見知らぬ人々に会うことを奨励する考え方にに基づき、特定の取引における長期的・固定的関係よりも、日々異なる人々と会って商売を行うことが、宗教的にも善とされているということは（片倉1991, 158—161）、特定企業との長期的取引に馴染んでいる社会、身を一カ所に「落ち着ける」ことに暗黙の価値が置かれている日本のような社会と比較した時、一層興味深いと言えるだろう。

#### 「カート」のくつろぎ

「ラーハ」の生活のイエメンでの最たる例が、先に見た「カート・タイム」の存在である。イエメンの社会・経済活動を語る時に、決して避けて通ることができない「カート」の習慣は、特に男性の生活を日々一定のパターンにはめこんでいく強力な力を持つことによって、「外」の世界での経済活動全体に影響力を及ぼす大きな力を持っている。

カートが、葉を飲み込んでしまうのではなく、噛んだものを頬にため、数時間かけてピンポン玉からこぶしくらいまでの大きさにふくらませはじめて心地よくなる作用を及ぼす性質を持つということは述べたが、それは午後から夕方までの長い「カート・タイム」の間じゅう、青年から老年に到るまで、また物売りから掃除夫、自動小銃をかかえた軍人に到るまで、いわば働き盛りの男子労働力の中核全体が、働かなくなることを意味している。

農業にしても、首都サナアを中心とした高原地帯には山を苦心して切り開いて小さなだんだん畑が数多くつくられているが、そこでの主役はカートになっ

ている。例えば岩山の絶壁の上にあるハジャラ村の私有地の段々畑には、小規模な畑にトウモロコシ、アワ、コーヒー、トマト、ジャガイモ、玉葱、カボチャ、ズッキーニ、バジルなどが栽培されており、まわりにはまた実のたくさんなる大きなサボテンが自生しているが、かなりの面積にカートも栽培されている。村全体でもカートの栽培面積は煙草と並んで最も大きく、村を囲んだ緑の風景は大方はカートで、主食や野菜の栽培をさえ押し退けている状態であった。

こうして人々は、農業の中核ともなっているカートの技を片手に、店の中で、街のお茶屋で、道端で、また車内で、何人かの友人や知人、あるいはその日に知り合った人々といっしょに話をしながら、幸せそうに青臭い葉を一枚一枚むしっては食べ、むしっては食べを繰り返す。枝分かれした長枝を持って、そこから葉っぱをのんびりと一枚一枚むしって口に入れる姿は、どこかパンダやキリンを連想させるものがある。多くの場合、彼らはカートを食べながら、同時に甘いミルク・ティーか、ミントの葉を入れたミント・ティーを飲み、煙草を吸う。結局のところ、彼らが働くのは、実質的に午前中だけである。たとえ午後後に働く場合にも、それはカートとお茶と仲間とのおしゃべりを並行しながら、ほほをふくらませ、のんびりと店番をしたり、軍務をしたりする形態をとる。

ヨルダンでも官公庁・企業は午後二時に終わるのが普通（清水，60）であるが、イエメンでは「カート・タイム」がある分、更に実質的な仕事は早く終わることになる。かといって、例えば労働時間が短縮されるかわりに労働時間中にはできるだけ集中的・効率的に仕事が進められるドイツのように（田中1994，56，68—69），仕事が午前中だけになる分，仕事が集中化・効率化しているのかというと，決してそうではない。勤務時間内における仕事の様子もかなりののんびりしたものである。例えばイエメンの航空会社イエメニアでも，一応9時に事務所は開くものの，そこに勤務する人は一人また一人と時間が立ってからようやくあらわれ，また，カウンターで待っている人々の順番も適当で，よほど主張しないと後から来た人に割り込まれ，二度と自分の番が来ることはない。

一人にかかる担当の時間も異様に長く、時にはおしゃべりで楽しく時を費やしている様子である。時々従業員の知り合いが来ると、当然にもその人の順番が優先され、彼らはカウンター内にまで入りこんで希望を言うこともある。これで昼すぎに仕事を終わりにされるとなると、どうやったら航空券を実際に手配できるかは、まさに「神のみぞ知る」状態となる。

### 「ラーハ」をベースにした生活の形

人々のくつろぎ＝ラーハは、このほかにも先に見たような様々な形を取る。移動すること、つまり旅をして見知らぬ人々に出会うことには大きな価値が認められているため、以前ならラクダやロバに乗って移動していた人々が、現在いわゆる「運転手」となって、イエメンにおける主要な乗用車であるトヨタのハイラックスやランドローバーなど4WDを運転することは、とても誇りある仕事として意識されている。また、程度がひどすぎて禁止されたフィリピンを除く多くの第三世界とも共通するが、移動と同時に車内で音楽をかけることにより、旅の楽しみは二倍になる。イエメン人が乗る多くの乗合バスでも、しばしば高い男声でコーランを熱唱する声はずっと流される。また、男女のかけあいの歌が現在も多いのもインドから中東にかけての一つの特徴であり、乗合自動車でもひっきりなしに次々とそうした歌のカセットがかけられる。

もちろん、家に帰ってからもこうした調子にあまり変化はない。日暮れ時になるとだれからともなく、イエメンの伝統的弦楽器ウードを弾き出す者、太鼓をたたき出す者が出てくる。と、それに合わせていつからか太鼓の音が二つ、三つに重なり、そのうちに誰かが立って踊りだすと、もう時を忘れて夜更けまでこうした時間を過ごすことになる。音楽のリズムや、踊りの形が比較的単調なもの繰り返しであるだけに、音の強弱と伴奏の有無に基づく盛り上がりはかえって大きく感じられ、寄せてはかえす繰り返しのリズムの中に、アルコールを全く飲まなくても、ある種のこちよい陶酔感が生まれるのである。

国は異なるが、シリアでもこれと同じ質を持つ事例を見出すことができる。ヨルダンから陸路国境越えをした時、乗合自動車に乗り合わせた子供連れの姉妹のダマスカスの家に招待された時のことである。パレスチナ難民パスポートを持ち、3才から15才まで8人の子供がいるにぎやかなこの家庭でのくつろぎ方は次のようであった。

20畳ほどの部屋に、コの字型にマットレスが敷かれ、夫婦・子供たち、客が気の向くままに座ったり、寝ころんだりするのが生活の基本である。食事もここで取る。大きな丸い敷物の上に、大皿で3、4品が置かれ、平べったいパンといっしょにみんなで丸い敷物を囲んで手をのばして食べる。昼間は暑いので、食事の後はみんなでごろ寝・昼寝をしてすごす。工事関係の仕事をしているという旦那さんも、仕事が休みだったり、行ってもすぐ帰ってきたりで、いつも家にいるような感じだった。彼は客にもまず昼寝を勧め、自分もまた客の前でごろりと横になって寝息をたてはじめる。彼は買物も自分でし、ナスの詰めものやヨーグルト・ソース、シリア風野菜サラダなども自分でつくる。アラブでは男性が買物や料理をすることはごく日常的である。

涼しい夕方になると俄然子供も大人も元気になり、子供たちは外で走り回りはじめ、大人は近所や遠方から来た客人をもてなして話をしたり、自分たちが出掛けていったりする。夕食後は、食事の部屋からくつろぎの場を中庭に移し、甘い紅茶を飲みながらみんなで話をする。そのうち、誰がうたい出すとみんなの手拍子が始まる。飲んでいるのは紅茶だけだが、日本で言えば相当酔いがまわっているとしか思えない雰囲気である。みんなで手拍子とともに歌い、誰かがそれに合わせて踊りだし、何人もがその輪に加わり、更に手拍子が大きくなるといった調子で大いに盛り上がる。さんざんうたって踊って疲れた後は、改めてくつろぎの場所を屋上に変え、コーヒー豆にカルダモンを入れたいわゆるトルコ・コーヒーを飲みながら、みんなでトランプのゲームに興じる。小さい子供たちは子供たちで、星や街の灯りを見たり、猫と遊んだり、暗い中でサッ

カーをしたりする。そして最後にまた部屋に戻り、紅茶を飲みながら話をするグループ、トランプの続きをするグループ、中庭で話をするグループなどに分かれ、夜が更けていく。両親を含めて誰も子供たちに寝ろという者もなく、ゲームをしていて眠たくなった者から、順々にその傍らで寝ていくのである。

同じことはエジプトのシナイ半島のベドウィンのキャンプでも体験したことがあり、こうした生活リズムは広くアラブ社会において一般的であると言えることができるだろう。

歌と踊りとゲームのほかに、もちろんテレビもある。シリアはアサド大統領を称賛する番組が頻繁に定期的に入るなど政治色の強いものが多いが、イエメンでは夜6時から8時のゴールデンタイムには、藤子不二雄の『パラソル・ヘンバー』や『マジンガーZ』、『ヤッターマン』系の『トマトマン』、『小公女セーラ』やサッカーアニメなど、世界の他の国同様、日本のアニメが上映されていた。午前中に大衆食堂で朝食を取る多くの男たちが熱心に見入っていたのは宮崎駿の長編アニメーション映画であった。ほかにも民族音楽や民族舞踊、結婚式の踊りの地域別代表の紹介などの番組や、女性も顔を見せるカラオケ風の音楽番組、商人ハッサンを主人公にした宗教色の強い民族ドラマ、殺人と男女関係がからんだ暴力的アクションなどの現代ドラマなどがある。もちろん、聖職者によるコーランの解説番組もあり、その一方で、女性が顔を出してアナウンサーを勤めるCNN風のニュース番組もある。アニメやニュース、カラオケやアクション映画という方向では、世界的な画一化の影響力が効いているとも言えるだろう（田中1996, 39-42, 田中1997, 157-161）。

いずれにせよ、こうした「くつろぎ（ラーハ）」の生活がなおイエメン社会をはじめとするアラブを大きく規定していることはまちがいない。これらの要素は、イスラームの宗教的教えに根拠を持っているものの、ホスピタリティーを大切にす、希薄でない人間関係、時間を気にしないでゆったりと過ごす心のゆとりやくつろぎなど、むしろ日本人や先進諸国において失われ、また回復が

めざされている人間的な「豊かさ」と同質のものがあると言ってもいいだろう (Velhelst1994, 199, 田中1997, 173)。

### (3) 「男女別世界」の二重性

これまで述べてきた世界は、家の中でのくつろぎを除くと、いずれも社会の表面に見える世界であり、一言で言えば「男」の世界、男の「社交」の世界であったと言える。しかし、例えば街を歩いて見ることのできるこの世界は、イエメン社会の半分をおおっているにすぎない。イエメンにはもう一つ、「女」の世界が分離して存在しており、これは「外」にはなかなか見えないものとなっている。しかしこの「女」の世界が、大きな生活領域を内側から支える一方の柱となっていることはまちがいない事実である。

アラブ諸国の中でもいわゆる「開発」が遅れてGNPが低位水準にとどまり、94年まで内戦が戦われ、結局部族的伝統を引いた勢力が社会主義勢力を制圧した形となったイエメン共和国は、近代化路線をとった反動からイスラム原理主義が登場してきた国とは異なり、イスラームの伝統をいわば即自的状态のまま残している社会であると言ってもいいかもしれない。このことは特に、男性世界と女性世界の対照性を他のアラブ諸国よりも一段と際立たせている。最後にこの「市場」に一切参加しない女性を含めた、男女の世界の分かれ方を具体的に見てみよう。

#### 完璧に分かれた男女の世界——「外」の男・「家」の女

首都サナアの小さな空港では、まず、同じアラブでもエジプトやヨルダンでは決して見ることのできない光景に出会うことになる。出迎え等で空港のホールにいる人々の99パーセント以上は男性である。そして自動小銃を持った緑の軍服の軍人以外の男性の8割くらいは、腰にベルトを巻いてジャンビアと呼ばれる刀(三日月刀)を胸から腹にかけて差している。この国には「磨刀令」はない。空港ホールに唯一いた子供連れの女性は、頭の前から足の先まで、全身

を黒い布でおおっている。長袖で長い丈の黒の服を着て、頭にヘジャーブと呼ばれる黒のショールをかぶり、更に目の所を約1センチほど残して顔全体をおおうのである。これで黒の手袋をすると、外から見た時、彼女はほとんど黒の物体にしか見えない。男性だけの世界の中にも、彼女は特に注目を引くこともなく、そこに居ることができるのである。

空港での光景は決して例外的なものではない。というよりも、外国との接触があり、一般的に「近代化」が進んでいるはずの空港でさえこうであるから、市内や地方については言わずもがなである。サナアの街においても、街を歩いている人、集まって話をしたり、買物をしたりしている人は、やはりほとんど男性から構成されている。通りの一角でモップや工具をかついで仕事の話・交渉の機会が来るのを待つ眼に見える「労働市場」における数十人もの人々の群れはもちろん、朝から座りこんで家の外でゲームに興じて人々も、国際援助物資としてまわってきた世界各国の上着や軍服を屋台で売りさばいている人、買っている人も、羊の肉を買いに行列を作っているのも、およそ見渡す限り街は老若の男性ばかりである。

最も正統派の男性の格好は、長袖で長い丈の白い服の上に、金糸でふちどりされたベルトに、革に金属細工のついた古い立派な刀を差し、その上に上着を着る。頭には赤または黒の模様のはいた布を巻き付ける。ただしエジプトやヨルダン、サウジ・アラビアのようにイカールと呼ばれる黒い巻き紐で押さえることはせず、巻き付けた布を左右にはさみこむやり方を取る。これはオリンピックでのイエメン代表選手の入場の正装でもある。実際には普通の長袖シャツを来て、腰から下にはインドやインドネシアなどと同じロンギー、ここではフータンと呼ばれる腰布を巻いている人が多い。頭もいつも布を巻いているわけではなく、三角の布をショールのように肩に掛け、日除けや汗拭きに使いながら、その時々で巻いたり巻かなかったりする。

サナアをはじめ高原地方の街では、比較的涼しいのでこの上に背広などの上

着を着ており、7～8割くらいの人が三日月刀を差している。しかし、紅海沿岸やアラビア海沿岸のホデイダやアデンなどの街では、気温が40度前後でかつ蒸し暑いため、上着はもちろん着ないし、刀を差す人も比較的少なくなっている。これには南イエメンの旧社会主義圏で帯刀が禁止されていたことも影響していると見られる。

街でたまに出会う女性の状況はどうだろうか。女性の場合、同性同士数人で連れそっていることが多い。彼女らは目の所1センチ以外はすべて全身を黒でおおうか、あるいは目の上からも更に黒い布をたらし、外側からは完全に黒いものしか見えない「完全武装」をしている人がほとんどである。目の上を黒い布でおおっても、昼間は外が明るいので中から十分外を見ることができる。何人もこういう女性が集まっている所では、背の高さや体格、かばん（これまたいてい黒）の種類で見ても誰が誰なのかすぐ見分けをつけることは難しい。

主流である黒の服装の中で多少異なっているのは、アフリカ系とベドウィン系の女性の場合である。アフリカ系の女性の場合、同じ服装であっても、色が黒ではなく、黄色やピンク、緑などカラフルな色の服やショールを身につけていたり、また顔を隠していない女性が多い。ショールが黒でなく、顔を見せている点では、ヨルダンやエジプト、マレーシアやインドネシアなど多くのムスリム諸国と共通しているが、イエメンにおいてはとても「大胆」で特殊な姿に映る。紅海沿いの街ではアフリカ系の女性の数が比較的多く、顔を出している女性も目立つ。しかし「海の近くの街は開放的」とか「旧社会主義圏だった南イエメンは近代的」と言われているほどにはその差は大きくはなく、やはり基本は、目しか出していない完全黒装束であった。ベドウィン系の女性の場合には、顔は隠しているものの、赤の地に黒と白のまざった大きな円が染められた布を顔の下に使い、赤に細かい模様の入った大きな布をショールと服に使っている。地方の部族ごとには、顔は黒で覆いながらも、ショールは黄色やピンク色などを使う場合もある。

子供の場合はどうだろうか。街の裏通りで見かけるのは、遊びふざける男の子たちの姿である。小学校から中学校くらいにかけての子供たちがよく仲間同士で遊んでいるが、同じような女の子たちの姿を見ることはできない。女の子を見かける場合は、だいたい8、9才、小学校の低学年以下の小さい子だけである。地方の村に行くと、この位の年までは、男女いっしょに走り回ったり、石を投げ合ったり、取っ組みあったりして遊んでいる姿を見ることができる。その頃の年までの女の子は、概してとても派手な格好をしている。土埃で汚れてはいるものの、レースやフリルのたくさん付いた白やピンクや黄色のワンピースが定番であり、日本では何かの発表会の衣装のようなものである。

小学校の真ん中くらいになると、女の子はまずショールを頭に巻きはじめる。はじめは「私も大人よ」と背伸びしておしゃれをしている様子である。しかし、高学年くらいになると最早家の中に引き込んで外には出てこなくなる。そして外出する時は、年齢もわからない黒い姿になるのである。村の中を移動する時や山や畑に仕事に行く時など、ちょっと家の外に出る場合でさえも、外出用の完璧な黒い格好になる。家の周りで遊んでいる子供を食事に呼ぶ時にも、不用意に家の中の姿のまま外に呼びに行くことはせず、家の扉の所に立ってものを叩いて合図の音を出すのである。

しかし、小さな女の子の派手な恰好からもうかがわれるように、女性は家の中では、黒のロングドレスから解放され、様々な色の服や装身具・化粧を家族や女友達と共に楽しむ。サナア市内の店を見ても、店の入口近くで黒の服を売る店でも、中に入るとピンクや黄色、緑、赤などの極彩色に、たくさんのレースや金糸・ラメを使ったドレスや布、また下着を売っており、これらを男性が買って家に持って帰って奥さんに着せるのである。また、金・銀・貴金属のブレスレットやネックレス、イヤリングなどの装身具の店も多く、これらの店には時々連れ立った女性の姿を見かけることができる。女性の服装の自由度にはもちろん国別に大きな差があり、家の内外で短いスカートも可能なエジプトや

トルコのような国もあれば、家の中だけショールをぬぎ、短い丈の派手なワンピースを着る人もいるヨルダンのような国もある。イエメンはその中でも特に堅い方で、家の中でも長袖の丈の長い服を着て、ショールはずっと付けたままの場合が多い。

家の内部も原則は同様で、部屋は男女別に別れている。ベドウィンの大家族の伝統的なテントでも、一つのテントが幕で男の部屋と女の部屋に分けられ、いつもは男女別にくつろぎ、客も男女別の部屋でもてなしを受ける。男の客は決して女の部屋に入れない。男の子・独身男性は男の部屋で休み、女の部屋が夫婦の寝室となる(Cole, 110—114; 片倉1979, 69—72)。イエメンの場合そこまで極端ではないが、絶壁の上にある小さな村ハジャラでの石づくりの伝統的家屋の例を取ると、5畳くらいで先祖代々伝わってきた古くて立派なジャンビアが三本、壁に掛けられているのが男の部屋で、男性家族の写真や学校の卒業証書などが飾られている。もう一つのもっと大きな部屋は女の部屋で、色鮮やかな絨毯がひかれ、コの字型にマットレスが並べられており、家族団欒の居間としてもくつろげるようになっている。壁にも風景画をあしらった大きな絨毯が掛けられ、ほかにも奥さんの手縫いの刺繍や飾り、金属の食器・コーヒーポットや水差し・香炉などが置かれている。

### 市場と切り離された女性の世界

このようにイエメンでは、かなり徹底した形で男女の棲み分けが形成されており、完璧なまでに男女の世界が分離された姿を見ることができる。それはつまり、女の世界が男による「市場」の世界には接しない「家」の世界をつくっていることを意味している。

特に服装に関して言えば、同じアラブでもエジプトやヨルダンではここまで徹底した形を見ることはできないし、シリアでも、ムジャヒディンの反乱がアサド大統領によって鎮圧されたハマのようなイスラム原理主義の強い街でのみ全身黒装束の女性が見られるにすぎない。この意味でイエメンはイスラム原理

主義を方向性として改めて強くかかげる必要もないほどに、イスラームの伝統が生きている社会だと言うことができよう。

ただし、一言だけ付け加えておくべきなのは、こうした伝統を西欧的価値観から一元的に、直ちに女性の抑圧・隷属であると判断することに性急になってはいけないということだろう。アラブの女性の世界ののびやかさを女性として経験してきた片倉（片倉1991, 90, 94-95）は、アラブの女性には「男と女の隔離ゆえに、ことさら、のびのびと自由を謳歌しているところがみえる。不特定多数の男たちの目を意識して、とりつくろうところがない。現代資本主義社会では、ともすれば、女性が男性の眼を意識して、いつのまにか商品化、あるいは付属品化する傾向があるのと対照的である」、「女たちはベールをかぶることにより、『見られる女』から『見る女』に変身する。これにより容姿だけで判断されることをきっぱり拒否して、中味で勝負しましょうということになる」と論じ、伝統をむしろ積極的に証価する視角をうちだしている。現在は、ミニ・スカートまで行った「近代化」への反動から、若い女性が逆にヘジャーブへ戻ろうとするエジプトやトルコでの伝統回帰の動き、アフガニスタンのタリバーン勢力によるヘジャーブ政策の徹底とそれへの女性からの支持と反発、またイランのハタミ政権樹立へ向かう選挙活動中におけるヘジャーブ不要論への女性からの高い期待など、ムスリム圏内でも評価が様々な形に多様化しつつ、また変化しつつあるのが現状であろう。

服装だけでなく、家を中心とした世界の分かれ方もきわめてはっきりしていた。つまり家の外は、仕事や買物、カートの社交や取引交渉を含めて、すべて「男たちの世界」であり、そこでは女性は男性の目を引くことのない「黒い物体」として例外的に姿を表すにすぎない。女性は「家の中」の世界の住人である。家事と育児、家周辺での農業やヤギ・羊追い、布づくりや縫い物などのちょっとした家内工業がその内容である。アラブ人の住宅について「労働、戦争、商売といった荒々しい公的世界に対して家はゆったりとしたアンチテーゼとなる

女性の領域である。……女性を意味する『ハリム』は、『ハレム』すなわち神聖なという語と関係を持ち、家族が暮らす場所を表している」(Cole, 101—102)と言われるように、女性を「市場」領域から「家」領域として切離することは、アラブの社会経済の一つの大きな特徴であると言っていいだろう。

このことに対しても、女性が公の場に出る自由が阻まれ、男性によって自立性が阻害されていると評価することもできる一方、逆に「これを買ってきて」と夫になんでも頼め、男はこの課題を果たさなければならないという逆転した力関係として見る見方も存在する。湾岸戦争の時にサウジ・アラビアの空軍パイロットが、「主夫」として家族の食料などを買いに行くために4、5日に一回くらいの割合で基地から自宅に戻って戦力が低下したという話(福田安志「買物は男性中心、礼拝時は閉店」島居, 177)や、イランにおいて「町の八百屋にも、肉屋にも、バグガリー(=スーパーマーケット)にも、大きなビニール袋を下げたお父さんたちの姿が必ずある。……昨今のテヘランでは家庭内の女権の強さの現れとも見える」(岩崎葉子「店先で話術を磨け」島居, 166—167)という話からも、アラブにおけるこうした男女世界の二重性はいずれにせよかなり一般化できると言えよう。

## おわりに 「市場」と「資本主義」の亀裂

「市場」がたとえ完全競争に基づく純粋市場にきわめて近い形で成立したとしても、その社会がいわゆる「西歐的」な「近代」や「資本主義」という形とは大きくかけ離れたものになりうることをこのイエメンの事例は物語っている。ブローデルの言う「地中海世界」の延長上にあるシリアもまた同様である。これらの「市場」における交渉の激しさは、物流・流通としての経済を律し、また、人々が日々定期的に費やすエネルギーの重要な部分を受け持っているものの、それを囲んでいる「生活」の領域ははるかに膨大であり、そこにおける「くつろぎ(ラーハ)」の論理の大きさは「生産」をものみこみつつ展開している。

そして「市場」からは文字通り場所的にも、見事なまでに完全に切り離された「女性」の世界が、全く異なるもう一つの力の世界をつくりだしていることの社会経済的意味も大きい。また男性においても、厳しいカートの品定めと値切り交渉のあとに続く、数時間にわたる午後の「カート・タイム」による男性世界全体の「休業」が、イエメン社会の「生活」領域の重要な部分をなしている。こうした「くつろぎ（ラーハ）」の生活はイエメンに限らず、広くアラブ世界、ムスリム世界に共通して展開しているが、昼食に時間をかけ、その後長い午睡＝シエスタの慣習を持ち、夜になってから歌や踊り・おしゃべりで時を過ごすような生活形態はスペイン・ポルトガルやギリシャなどにも見られ、その意味では一つの地中海類型をなしていると言えるかもしれない。

ポランニーは「18世紀末まで、西ヨーロッパでは工業生産が商業の単なる付属物＝アクセサリーにすぎなかった」と述べているが（Polanyi, 23, 31）、イエメンをはじめとするアラブ経済においては、工業生産が商業の単なるアクセサリーでしかない時代が、現在もなお継続していると見ることもできるだろう。この意味でイエメンの経済システムは、イスラームとして、あるいはラーハとしての「社会システム」のなかに現在も吸収されつづけていると言える。

この文脈で言うところ、資本主義の生成において「流通形態が生産過程を把握することの決定的意義を説いた宇野弘蔵の指摘の重要性を改めて確認することができる。生産過程自体が市場メカニズムの中に組み込まれない限り、結局のところ資本主義が全社会を包摂することにはならないのである。流通における死闘のような競争と交渉が、技術革新・労働管理の変革をも含む一連の生産過程と連動していく時、更に宇野の指摘にプラスして言えば、それが人々の生活領域、時間感覚、男女の社会的役割分担などの論理——ここで言うならばイスラームの論理、ラーハの論理——にまで浸透していく時、はじめて「完全競争」の市場モデルは資本主義経済に連動しうるのであり、決してその逆ではないのである。「なぜ中東は繁栄する市場経済をもちながらも、資本主義化に失敗した

のか」という加藤の提起する問題（鳥居，204）は，まさにこの点から答えられなければならないだろう。

この意味でイエメンをはじめとするアラブ経済は，まさに「市場」の原型を見せてくれると共に，その「市場」経済の存在だけからでは資本主義経済モデルに展開しえないこと，「市場」が資本主義経済のモデルを構成するためには，人々の生産過程を内に含む膨大な生活・文化領域での変革を伴わねばならないことを示していると言えるのではないだろうか。

## 注・文献

- 森嶋通夫『思想としての近代経済学』（岩波書店，1994年）  
 加藤博『文明としてのイスラム』（東京大学出版会，1995年）  
 同『「市場社会」としてのイスラム社会』（『社会経済史学』第63巻第2号，1997年）  
 片倉もと子『イスラームの日常世界』（岩波書店，1991年）  
 同『アラビア・ノート』（NHK 出版，1979年）  
 清水芳見『アラブ・ムスリムの日常生活』（講談社，1992年）  
 鳥居高編『発展途上国の市場とくらし』（明石書店，1997年）  
 Donald Powell Cole, *Nomads of the Nomads, The Al-Murrah Bedouin of the Empty Quarter*, Chicago, 1975, 片倉もところ訳『遊牧の民 ベドウィン』（社会思想社，1982年）  
 Sania Hamady, *Temperament and Character of the Arabs*, 1960, 笠原佳夫訳『アラブ人の気質と性格』（サイマル出版会，1990年）  
 Karl Polanyi, *The Self-regulating Market and the Fictitious Commodities: Labor, Land and Money*, in: *The Great Transformation*, New York, 1944, 玉野井芳郎・平野健一郎編訳『経済の文明史』（日本経済新聞社，1975）  
 Thierry Verhelst, *Des Racines pour Vivre*, Paris, 1987, 片岡幸彦訳『文化・開発・NGO』（新評論，1994年）  
 田中洋子『「企業に合わせる家庭」から「家庭に合わせる企業」へ』『日本型企业社会

と社会政策』(啓文社, 1994年) 所収

同『『否応なく』世界経済に巻き込まれる段階における社会科学の視角』『社会科学の新しいパラダイム』(筑波大学大学院社会科学研究科, 1996年) 所収

同『『西側』的経済発展と非『西側』的対応の連関——『多様性』と『画一化』の同時存在がもたらすもの』『社会科学の非西欧的パラダイム』(筑波大学大学院社会科学研究科, 1997年) 所収